

宮城 社会 3.11大震災

## <大川小と門脇小> 悲しみの母校と向き合う

東日本大震災で被災した宮城県石巻市の大川、門脇両小校舎の遺構保存をめぐり、市民を対象とした公聴会が13日、同市内であった。遺族や地元住民ら男女計21人が持論を展開。「震災の教訓を後世に伝えるため必要」「見るたびにつらくなる」などと複雑な感情が交錯した。

◎大川小 永沼悠斗さん（21）「風化させたくない」

多くの大切なものを失った震災から5年近くがたち、やっと一步前へ進めた。

大学3年永沼悠斗さん（21）は大川小の公聴会に臨み、約70人を前に母校の保存を訴えた。「大川小を見て防災意識を高め、多くの命が救えるなら残した方がいい」

2011年3月11日。石巻市長面地区にあった自宅は津波で流され、大川小2年だった弟=当時（8）=を亡くした。永沼さんはしばらく、思い出が詰まった大川小を見ることも、足を運ぶこともできなかった。

小学校卒業後に通った旧大川中が震災の影響で13年3月に閉校となり、校舎は解体。愛着ある学びやが姿を消し、寂しさと悔しさが募った。

「震災を経験した者にとって風化させず、警鐘を鳴らし続けることは使命。せめて大川小だけでも残したい」。公聴会開催を知り、公の場で意見を述べる決意をした。

会場で解体を求める遺族らの切実な声にも耳を傾けた。「遺族のつらさはよく分かる。保存、解体どちらの意見も大事。どちらかが多いから良いというわけでもない」

亀山紘市長は本年度内に保存の可否を判断する見通しだが、永沼さんは時期尚早と考える。

「もっと話し合いの場を設け、広く、深く意見を聞いてから結論を出してほしい」と切望する。

◎門脇小 阿部桃花さん（17）「世代を超えて残したい」

母校の遺構保存をめぐる議論を聞き、震災時の在校児童として意見を言いたいと思いマイクを握った。

「門脇小を残してほしい」。石巻高2年の阿部桃花さん（17）は静かに話しました。当時は6年生。地震の後、教師の引率で背後の日和山に登り、難を逃れた。

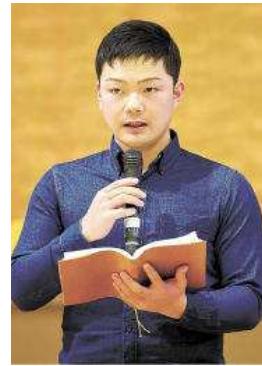
同校は、学校にいた児童約270人が日和山に避難して無事だった。訓練で地震が来たら高台に逃げろと教えられていたという。

自宅は被災を免れたが、津波やがれきに引火して炎が迫った。門脇、南浜両地区では400人以上が死亡・行方不明。友人の多くは家や家族を失った。

阿部さんは「悲惨な姿になった校舎は震災を伝えるシンボル。何世代も先に伝えていきたい」と訴えた。

校舎近くに住む宮城水産高教諭平居高志さん（53）は解体を主張し、防災教育の在り方に疑問を呈した。「過去の災害が伝えられていないかったと言うが、実際はたくさんあった。ただ、私たちに歴史に学ぶ姿勢がなかっただけ」と断じる。

それでは多大な費用を掛けて校舎を残しても、防災につながらない。平居さんは「校舎の保存よりも、過去に学ぶ心を教育していくことにエネルギーを費やすべきだ」と呼び掛けた。



大川小の公聴会で校舎の保存を求める永沼さん

拡大写真



門脇小校舎の公聴会で意見を述べる阿部さん

拡大写真

石巻市の震災遺構の保存をめぐる公聴会の発言者要旨

	賛成	反対
大川小	男性 未来の子どもの命を守るために残すべきだ 女性 救えたはずの命があったことを伝え続けたい	男性 解体し犠牲者の魂が帰って来られるよう整備を公認化し、地元住民が安らぐ場にしてほしい 女性 公認化し、地元住民が安らぐ場にしてほしい
門脇小	男性 震災を後世に伝えるために被災校舎が必要だ 女性 母校で思い出がある。防災対策にもつながる 男性 自然災害の被災建築物を残すことは疑問だ 女性 人が住む場所に廃墟を残さないでほしい	男性

拡大写真